

令和6年度入学 社会福祉学部 学校推薦型選抜（一般／専門高校・総合学科）試験問題の出典

種別	大問 番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	一	小玉 重夫	シティズンシップの 教育思想	2003年 P44-48より 一部改変	白澤社

社会福祉学部

小 論 文 (90 分)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この冊子は、**2 ページ**あります。なお、下書き用紙が2枚あります。
3. 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
4. 解答は、必ず**黒鉛筆**（シャープペンシルも可）で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
5. 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
6. 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
7. 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
8. 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 100 点)

ソクラテスという人は、教師のモデルだともいわれている。教育哲学の授業は、ソクラテスの産婆術(対話による真理探究)の話から始められることが多い。

ソクラテスが生きた当時のアテネでは、ソフィストと呼ばれる一群の知識人たちが活躍していた。ソフィストという言葉は、倫理や哲学の教科書などでは^{きべんか}詭弁家といった悪い意味で使われることもあるが、もともとの意味は「知恵のある人」という意味で、自らを「知恵のある人」と自称する人々がソフィストたちであった。彼らもある意味で教師のモデルの1つだった。

当時のアテネは直接民主制だったから、アテネ市民にとって政治的に自分の意見をいかにして多くの人々に説得的に伝えることができるか、主張を通せるかということは重要な関心事であった。そこで弁論術、レトリックの技術がもてはやされることとなった。いまでいうと、演説やディベート術のようなものである。この弁論術、レトリックを教えることが当時のアテネの教育、政治教育の支配的な流れで、それを代表していたのがソフィストと呼ばれた一群の弁論術、レトリックの教師たちであった。

こうしたソフィストの代表的な人物としては、「人間は万物の尺度である」という有名な言葉を残したプロタゴラスという人がある。古代ギリシアの民主制においてソフィストたちの果たした役割を評価する思想史家の関心は、以下のように述べる。

「プロタゴラスの挑戦は、貴族に対するギリシア的民衆教育者の伝統的な闘争を総括するものとして出現し、包括的で革命的な原理として前5世紀のポリスの民主制の理論的支柱となった。」

ポリスの民主制では、市民が討論し、そこで決められたことは万物の尺度になりうる、そういう民主主義の政治に対する絶対的な信頼が存在し、それが、ソフィストたちの活躍の基盤となっていたのである。

ソクラテスもまた、民主制の受容という点ではソフィストたちと前提を共有する。しかし彼は、ソフィストたちがポリスの中で政治的に自分の意見にどうやって説得力をもたせるかということのみを目的として、知識の内容を問わずに弁論やレトリックの技術だけを教育することを強く批判した。それはソクラテスが民主制の墮落を危惧したからにほかならない。

ソクラテスは「無知の知」といって、自分が知らないということを知ることが重要なんだといっているが、それはある意味で、「人間は万物の尺度である」といって人間による世界の構築を全面肯定したプロタゴラスに対する全面批判であるということもできる。こうしてソクラテスは「なぜ?」、「どういう根拠で?」という問いを投げかけながら、当時のアテネで通用していたさまざまなルールとか常識といったものをことごとくひっくりかえしていく。

ソクラテスの産婆術は、対話を重視するという点では、一見ソフィストたちの弁論術とも似ている。だが、ソクラテスの対話は説得を目的とするものではなく、むしろ先入観を排して真理を追究するためのものだったという点で、ソフィストたちのそれとは本質的に異なるものである。また他方では、真理の高みからポリスの政治を見下し、支配しようとするプラトンの姿勢とも異なるものであった。

現代の政治思想家ハンナ・アレントはそうしたソクラテスの姿勢を再評価し、以下のように特徴づけている。

「ソクラテスは、市民各自に彼らの真理を産出させる努力によって、都市をより真実なものたらしめようと願った。このことを遂行する方法が「問答法」、すなわち、最後まで論議し合う手法にほかならず、この問答法は、「偏見（ドクサ）」、つまりオピニオンを破壊することによって真理を生み出すのではなく、反対に「偏見（ドクサ）」をそれ自身の真実な姿において開示するのである。そこで哲学者の役割は、都市を支配することにあるのではなく、都市に対して虫のアブのようなノイズの役割を果たすことにこそある。」

つまりソクラテスは、政治の世界に埋没するソフィストたちとも、哲学の世界の高みにたつプラトンとも異なり、政治と哲学の両者の緊張関係を前提としながら、両者を媒介しようとしたのである。そこで哲学者は、都市国家を支配する哲人王^註ではなく、都市国家に対してノイズの役割を果たすような存在として位置づけられている。この点に、ソクラテスの哲学的思考の独自性がある。

このようなソクラテス的な姿勢は、今日の学校の教育課程、カリキュラムのあり方を考え直し、それを改革していくうえでも参考になるのではないだろうか。すなわち、従来の学校カリキュラムの構造の中心をなすのは知識としての教科であり、それはちょうど古代ギリシアにおける哲学（真理）に対応する。それに対して教科外の特別活動における生徒会活動や学校行事はポリスの政治（説得）に近いものを含んでいる。

いまの学校は、この教科と教科外活動の両者が切り離されたままで、しかも前者が中心で優位をなすものとしてとらえられ、後者はあくまでも特別な領域としてみなされ、あまり重視されない傾向がある。それが、市民としての政治的判断力の教育を妨げてきた。②ソクラテス的な姿勢は、この両者を対等な関係に位置づけなおし、それを架橋、媒介することによって、そうした状況を変えていくためのヒントになるのではないだろうか。

注：哲人王 プラトンの考える、理想国家における君主のこと。プラトンは哲学者が政治を執り行うべきと考えた。

（小玉重夫『シティズンシップの教育思想』、白澤社、2003年、pp.44・48より、一部改変）

問1 下線部(1)について、ソクラテスはプロタゴラスをどのように批判していると筆者は考えているか。

「それ」の内容に触れながら、100字以上130字以内でわかりやすく説明しなさい。

問2 下線部(2)で述べられている筆者が必要と考える教育のあり方について、生徒会活動あるいは学校行事のいずれかをを用いて具体的な実践例を挙げながら説明し、それに対するあなたの考えを500字以上600字以内で記述しなさい。